

四万十の森で、山と共に生きる 60年生の山師 一中土佐町大野見一

清流通信読者の皆様こんにちは。今回は中土佐町大野見地区からです。

▲ 大野見『全山植林』の時代 ▲

四万十川の上流域、中土佐町大野見地区。地域の9割を占める山林の中を縫うように流れる四万十川に沿って、細長く耕作地が広がる。この大野見地区は良質のヒノキの産地で、昭和30~40年代には『全山植林』を合言葉に住民あげて植林に取り組んできた歴史がある。それから50年近くが経った。しかし、山で栄えたこの集落は、その後、日本のどの山村集落にもある問題を抱え、木材価格の低迷に苦しんできた。昭和20年代後半に4300人ほどだった人口は、今ではその1/3ほどに減少した。そして、その時代に植えられたままの樹齢50年前後のヒノキや杉の森が、“手入れ”を今か今かと待ち続けている。

▲ 山と共に生きてきた60年 ▲

中土佐町大野見竹原、目の前を四万十川の支流竹原川が流れるこの地に生まれた中越安美さん(72歳)は、中学校を卒業すると同時に飛び込んだ林業の世界で、60年近くを山師として生きてきた。木の文化の日本がまだまだ元気だった頃、中越さんは木曾でヒノキや杉の伐採の仕事をしたこともあったという。

「そりゃぁキレイな木じゃったぜえ。」かつて伐ったという自然木の300年ヒノキの話をした時に、中越さんはそう言って懐かしそうに笑った。「けんど大野見の山は今から50年ぐらい前に植林したがぁよ。杉は『一代で2回喰える』と昔から言われちゃって、太るがぁが早いけんど、大野見の山に植えたがぁは、ヒノキやった。」ヒノキの成長は杉に比べると遅いので、戦後一斉に植林をした大野見の山は、あと20~30年を待たなければ伐れないという。

植林後の森林には成長に合わせ、日光の入りをよくするよう木々を適度な間隔に伐る間伐作業をはじめ、多くの人間の手が必要だ。まず、植林後8~10年ほどで下草刈りをして浅木などを伐っていき、その後は10年ごとに間伐をし、また枝打ち作業も木が若いうちにしなければならぬという。

「木が安っすうなって、伐っても売れんし、今のわしの仕事はほとんどが間伐じゃ。けんどこは、植えたはええが手入れがなんちゃぁできてないき、間伐はなんぼでもある。」大野見には、ここ何年も手入れをされていない山もあると、中越さんは嘆く。手をかけてもそれに見合う収入が見込めない林業からは、離れる人も多いのだ。

▲ 四万十川が清流である為に ▲

四万十川の清流を育ててきた四万十の森。ここに降った雨は、この森の木々の間を潤しながら四万十川の清らかな水となる。その豊かな水は、やがて鯨が泳ぐ太平洋に注ぐ。四万十川は、こうして流域の人々によって、ずっと守られてきたのだ。

一方、手入れのされていない山は鬱蒼として暗く、もちろんそこに育つ下草はほとんどない。そのため、露わになった土壌にひとたび雨が降れば、山林は一気に谷と化し、下流にその水を放出する。近年少しの雨でも洪水を引き起こしたり、雨の後の川の濁りがひどいのは、この辺りに原因があるとも言われている。だから、清流四万十川を守るためにも、山の間伐は重要な仕事なのだ。

▲ 森と木との対話と、60年の年輪と ▲

間伐は、“他人にしてもらうのが原則”という。なぜならば自分で育ててきた木は“惜しくて伐れない”という理由があるらしい。また、どの木を伐るかと言う作業“選木”にはかなりの経験があると聞く。この道60年の中越さんですら、『今でも迷うことがある』という。「3本の木が並んであったら、真ん中の木が曲がって育つ。どの木を切ったらえいかは経験にたよるしかない。」一本の木を伐るときにも、その木だけでなく周りの状況を見る必要があるという。だから、常に真剣勝負を挑む。

こうして、大野見の山の植林をし、下草を刈り、間伐をし、木の声と森の声に耳を澄ませて対話をしながら、中越さんは山と向き合ってきた。そこには、60年を山と共に生きてきて、自信に裏打ちされた深い深い年輪が、まるで見えるようだった。



プロフェッショナルの道具、チェーンソー